In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	教育実践の取組み事例の分類に基づく、大阪市立大学における教育改善・FD の実態
Author	平, 知宏 / 飯吉, 弘子
Citation	大阪市立大学大学教育. 11 巻 2 号, p.71-78.
Issue Date	2014-02
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-105

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

資料

教育実践の取組み事例の分類に基づく、大阪市立大学における教育改善・FDの実態

Education improvement and faculty development in Osaka City University: grouping of the educational practices

平　　知　宏・飯　吉　弘　子
大阪市立大学大学教育研究センター

TAIRA Tomohiro & IIYOSHI Hiroko
Osaka City University, Center for Research and Development of Higher Education

抄録

本稿は、2011年度末に実施した、「大阪市立大学の教育・FDに関する教員の意識調査　本調査」のうち、各教員が記述した教育実践・改善の取り組み事例の自由記述について分類と整理を行い、本学における教員の日常的な教育実践・改善の実態を可視化し、今後の議論や改善に役立てたり、教員が教育実践に相互に活用したりできるための、基本となるデータを提供することを目的とした。データ分析の結果、本学における教員の教育実践・改善の取り組みは、大きく分けて 5 つのタイプに分類されることが明らかとなった。また、科目や授業の形態によっても、いくつかの特徴的な取り組み内容が見られた。今後これらの結果に基づき、本学における教育改善・FDの実態について、教員相互に活用出来るデータベースとして学内に公開していくことを目指している。

キーワード：アンケート調査、自由記述分析、FD
Keywords: questionnaire survey, analysis of free description, FD

1．はじめに

本稿では、2012年 2 ～ 3 月に実施した「大阪市立大学の教育・FDに関する教員の意識調査 本調査」(以下、「本調査」）の結果に基づき、大阪市立大学（以下、本学）での教員の教育改善・実践に関する意識についての議論を行う。

本学における教育への取り組みは、従来から個々の教員の自発的・自律的な実践により成り立っており、全学的あるいは各部局での教育改善に関する研修会等において、各教員の実践事例が長年報告されてきている。また、本学における教員の教育的な取り組みについては、2003年度に全学的に実施した「FDに関する教員の意識調査」でも、一度明らかにされているが、その後8年を経て、大学を取り巻く状況が変化しつつある中、新たな情報の収集と集約が望まれる状況にあった。

さらに、2011年 3 月に制定された「大阪市立大学教育改善・FD宣言」では、従来から行われてきた個々の教員や各部局の自発的・自律的な教育改善活動を尊重し基盤にするとともに、それらを支援するための部局を超えた全学的な教育改善も組織的に行っていくことが改めて確認された。組織的な全学的教育改善支援のためには、個々の教員レベルで日常的に行われている教育に関わる工夫や取組に関する事例情報を全学的な形で集約しつつ、それらの情報を教員相互に教育実践の改善に役立てることのできる形に整理分析して取りまとめ、部局を超えた形でそれら情報へのアクセスや検索を容易にすることも効果的であると考えられる。

こうした背景をもとに、大学教育研究センターは、「本調査」として、2011年度末に、本学における個々の教員の教育全般やFDに関する全学的な意識調査を実施し、近年における本学教員の、教育に関する包括的な意識と教育実践やFDの状況を把握する試みを行

った。「本調査」は、本学での教育年数、職階、役職経験などの各種教員属性に基づき、数値化可能な多肢選択式設問と、多くの自由記述設問を用いることで、本学での教育実践・教育改善に関する教員の最近の意識と日常的取組の状況を、詳細に引き出すことを試みている。

このうち多肢選択式設問については、2012年度末に出された「報告書」[1]の「本調査数値部分報告書」において分析が行われ、さらに本紀要別稿、飯吉・平（2014）の資料論文[2]においても、数値部分の分析結果を中心に報告がされており、本学の教育にかかわる各種実態について明らかにされている。一方で、数値データに基づく教育調査の結果については、与えられた問いかけに対する所与の反応しか得られないという、方法論上の限界も見られる。

そうした数値データに基づく現状把握ではとらえきれない部分や、教育実践のより詳細な情報を収集する目的で、教員の教育に関する意識や取り組みを自由に記述させる設問を数多く設けていることが、「本調査」の大きな特徴である。本稿は、この自由記述回答結果を使って、とくに各教員が記述した教育実践や改善の日常的取り組み事例の自由記述についての分類と整理を行い、本学における教員の日常的な教育実践・改善の実態を可視化して、今後の議論や改善に役立てたり、教員が教育実践に相互に活用したりできるための、基本データを提供することを目的とした。具体的には、上述の「報告書」のうちの「本調査自由記述部分報告書（中間）」の自由記述データをもとに分析と整理を行った。

2．方法

2．1．調査概要

本調査は、2011年度に本学の専任および特任の全教員を対象に実施された全学的調査であった。調査の形式は、無記名式（ただし、追跡調査に協力意思がある教員の場合は記名あり）で、アンケート調査用紙、もしくはWeb調査形式で行われた。調査内容の詳細については、先述の本紀要別稿を参照されたい。

2．2．本稿で扱う調査結果の範囲

調査は大きく8項目からなり、そのうち「授業において実際に行っている工夫・改善とその内容」についてたずねる大きな項目（調査票Q3）が1つ含まれていた。「授業において実際に行っている具体的な工夫や改善」項目の中には、さらに選択式による回答と自由記述による回答を求めるものとに分かれていた。本稿では、教員の具体的な教育改善・教育実践について、調査対象者に自由記述を求めた部分について報告を行う。

自由記述による回答を求めた部分は、2種類であった。1つ目は教員自身の教育改善・実践・工夫のうち、特に教員自身が「効果的であった」と認識していた取り組み事例について、その詳細を最大3件まで報告することを求めた。なお事例報告の際、取り組みの意図（学生に学ばせるという観点からの工夫と、教員が実施するという観点からの工夫、計20の選択肢から複数選択）、取り組みを行った科目（全学共通教育科目、学部専門科目、大学院科目から選択　複数選択可）および授業形態（講義、演習・ゼミ、実験・実習から選択　複数選択可）を同時に選択することを求めた。また2つ目は、教員自身の教育改善・実践・工夫のうち、とくに教員自身が「効果的でなかった」と認識していた取り組み事例について、その詳細を1件報告することを求めた。「効果的でなかった」事例についても同様に、取り組みの意図、取り組みを行った科目、授業形態について選択肢より報告を求めた。

2．3．調査回答者

調査は、先述の通り、本学の専任および特任の全教員889名を対象としたものであった。このうち調査に回答した者は289名であり、本稿の分析対象となる調査票Q3（2）（3）の自由記述部分に対し有効回答を返した人数は、206名であった。

3．結果と考察

3．1．結果の処理

回答者から得られた事例は計510件であった。教育実践・改善に「効果的であった」取り組み事例は429

件、「効果的でなかった」取り組み事例は81件であった。そのうち、取り組みを行った科目、授業形態については、表1にまとめている。

表1. 取り組み内容　科目・授業形態別内訳（記入なし項目以外で重複あり）

科目別	全学共通科目	学部専門科目	大学院科目	（記入なし）
	109件	283件	78件	112件
形態別	**講義**	**演習・ゼミ**	**実験・実習**	**（記入なし）**
	296件	92件	63件	137件

本稿では、取組内容のこれら事例の具体的な記述内容・意図に基づき、28の属性情報を付与した。この時の付与の方法は、1事例につき複数の属性情報を付与しても良いものとした（例：「学生に毎回の授業時の最初にその日の講義の重要な論点に関する課題を出しておき、それを意識しつつ講義を聴いた上で、その課題に対する個々の学生の自分なりの見解を論理的に書かせる小レポートを最後に課す。その際、講義をそのまま書き留めるようなレポートを書かせないために、レポート用紙は書かせる直前に渡して、自分なりの言葉で書かせるように工夫している」という事例に対しては、「レポート課題を用いる」「授業構成を工夫する」という2つの情報を付与するなど）。28の属性情報と、510件の事例に対する付与数については、表2にまとめた。

３．２．分類結果

28の属性情報に関して、属性間の共選択割合を求めた。このデータは，取り組みの類似性・同時実行性を表しているといえる。このデータに基づき、各属性の関係性について視覚化を行ったところ、本学での授業実践において行っている工夫・改善には大きく分けて5つのタイプが存在することが推測される（表3参照）。

1つ目のタイプは、教員と学生とのやりとりの充実をはかることを目的とした工夫・改善であり、レポート課題、小テスト、授業における教育の道筋や意義の説明などを行うことで、学生との関係性を構築する手段を集めたものとなる。これらの手段をとることにより、副次的な効果として「学生の自学自習をはかる」「学生の状態を把握する」ことなども付随すると考えられる。

2つ目のタイプは、学生相互のやりとりの充実をはかることを目的とした工夫・改善であり、ディスカッションやグループワークなどを取り入れた工夫・授業改善などがその手段として挙げられる。このタイプでは、文書の執筆やプレゼンの練習指導なども取り入れることにより、専門教育への足掛かりとなることも推測される。

3つ目のタイプは、授業に対する学生の意欲・関心を維持させることを目的とした工夫・改善であり、授業内での話し方・伝え方を工夫することや、扱うトピックを学生の興味・関心に沿ったものにすることで、目的を達成しようとするものである。特に、トピック選択の背景には、学生自身が施行することを促す意図があると考えられる。

4つ目のタイプは、授業資料そのものの工夫・改善である。具体的な事例として、板書のノートテイクに関わる具体事例がいくつか挙げられている。

5つ目のタイプは、学生自身が実践・体験する学習をとりいれた工夫改善である。これには、学外との交流を目的とした事例がいくつか挙げられている。

３．３．科目・授業形態と取り組み内容の対応関係について

各科目・授業形態と、前節に基づく取り組み内容の分類結果の対応関係について、各件数を母数とする割合を算出し、表4に示した。各科目・授業形態との関係性を見ると、いくつか特徴的な結果が得られた。

例えば、「扱うトピックを考える」「学生の意欲・関

表2. 事例に付与された属性情報、および付与数（重複あり）

属性・タグ名	定義	件数（効果あり/効果なし）
学生とのやりとりを充実させる	質問やコミュニケーションペーパーなどにより、教員―学生間の意思疎通を図る	69 / 13件
小テストを用いる	授業内で小テストを実施している	33 / 5件
学生の状態を把握する	学生の授業態度、学習成果、授業内容へついて来ているかどうかを確認している	33 / 0件
レポート課題を用いる	授業内でレポート課題を実施している	23 / 6件
学生の自学自習を促す	授業を通じて、学生が授業内容について自学自習するための工夫をしている	22 / 5件
Webサイト・メールを活用する	教員が個人的にWebサイトやメールを活用している	16 / 3件
教育の道筋・意義を語る	シラバスに基づく授業の目的や意図、授業の方針などを説明している	13 / 1件
学生の事後学習を促す	授業後に学生が授業内容について事後学習するための工夫をしている	15 / 0件
若手教員・TA・院生・上回生を活用する	授業進行に若手教員やTA、院生や上回生を積極的に関与させている	13 / 1件
学生の事前学習を促す	授業前に学生が授業内容について事前学習するための工夫をしている	13 / 0件
学生の文章執筆・プレゼン指導を行う	レポート・論文の執筆やプレゼンテーションの指導に関わる	41 / 5件
ディスカッションを取り入れる	学生や教員同士が、授業内で意見交換を行う手法を取り入れている	29 / 6件
グループワークを行う	学生が数人で集まって活動を行う手法を取り入れている	33 / 0件
学生相互のコミュニケーションを促す	学生同士が、授業内で意見交換を行う手法を取り入れている	21 / 4件
専門研究との連携をはかる	専門教育との関連性を意識した授業を行っている	20 / 2件
英語による授業を行う	英語による授業や発表を取り入れている	13 / 4件
学生中心の授業を行う	主な授業内課題の実施やマネージメントなどを、学生自身に行わせている事	12 / 4件
学生の意欲・関心を高める	授業に対し、学生の意欲を持続させたり関心を集めたりする工夫をしている	31 / 20件
扱うトピックを考える	教員が授業内で、学生の興味を引くような授業トピックを選択している	39 / 3件
学生の思考を促す	学生自身が積極的に思考することを促す工夫をしている	16 / 0件
話し方・伝え方を工夫する	教員の授業内での話し方、情報の伝達の仕方などに工夫している	6 / 2件
授業資料を工夫する	授業内で用いるレジュメ・視聴覚教材などに工夫をしている	96 / 18件
板書・ノートテイクを工夫する	板書やノートテイクなどに工夫している	8 / 7件
体験・実践型学習を取り入れる	授業内容に基づいた実践や学生の体験を重視した工夫をしている	30 / 1件
外部との交流をはかる	授業内活動として、学外の組織や団体と交流することを取り入れている	24 / 1件
授業構成を工夫する	授業の進行や全体的な構成などに工夫をしている	15 / 12件
組織内・教員同士の情報交換を行う	教員同士で相互に授業の評価を行ったり、議論をしたりしている	5 / 2件
教員側の意識を高める	授業・教育を行うに当たり、教員が持つべき意識や心構えについて言及している	6 / 0件

表3. 取り組み事例属性　属性間選択割合

※縦軸属性と判定されたもののうち、同時に横軸の属性が判定された割合をまとめている

属性・タグ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
タイプ1																												
1 学生とのやりとりを充実させる	–	4%	17%	9%	5%	6%	5%	4%	5%	4%	7%	6%	1%	1%	0%	1%	2%	7%	2%	2%	0%	6%	1%	0%	1%	4%	0%	0%
2 小テストを用いる	8%	–	29%	11%	5%	0%	3%	18%	0%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	3%	0%	0%
3 学生の状態を把握する	42%	33%	–	12%	3%	0%	0%	12%	0%	0%	0%	3%	9%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	6%	0%	0%	3%	6%	3%	0%
4 レポート課題を用いる	24%	14%	14%	–	10%	3%	0%	7%	3%	0%	3%	3%	3%	3%	0%	0%	3%	10%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	3%	0%	0%
5 学生の自学自習を促す	15%	7%	4%	11%	–	11%	0%	15%	0%	4%	15%	7%	11%	7%	0%	4%	4%	19%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%
6 Webサイト・メールを活用する	26%	0%	0%	5%	16%	–	0%	16%	0%	5%	0%	5%	0%	5%	11%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	11%	0%	0%	0%	5%	0%	0%
7 教育の道筋・意義を語る	29%	7%	0%	0%	0%	0%	–	7%	7%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	0%	7%	14%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
8 学生の事後学習を促す	20%	47%	27%	13%	27%	20%	7%	–	0%	13%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	7%	0%	0%
9 若手教員・TA・院生・上回生を活用する	29%	0%	0%	7%	0%	0%	7%	0%	–	0%	7%	7%	14%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	0%
10 学生の事前学習を促す	23%	23%	0%	0%	8%	8%	0%	15%	0%	–	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	15%	0%	15%	0%	0%	0%	8%	0%	0%
タイプ2																												
11 学生の文章執筆・プレゼン指導を行う	13%	0%	0%	2%	9%	0%	0%	0%	2%	0%	–	22%	26%	15%	11%	11%	11%	7%	2%	4%	0%	7%	0%	9%	2%	4%	0%	0%
12 ディスカッションを取り入れる	14%	0%	3%	3%	6%	3%	0%	0%	3%	0%	29%	–	31%	17%	0%	3%	9%	0%	3%	6%	0%	3%	0%	0%	3%	3%	0%	0%
13 グループワークを行う	3%	0%	9%	3%	9%	0%	3%	0%	6%	0%	36%	33%	–	33%	0%	0%	6%	3%	3%	6%	0%	3%	0%	6%	3%	0%	0%	0%
14 学生相互のコミュニケーションを促す	4%	0%	4%	4%	8%	4%	0%	0%	0%	0%	28%	24%	44%	–	0%	0%	12%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	4%	0%	0%
15 専門研究との連携をはかる	0%	0%	0%	0%	0%	9%	0%	0%	0%	0%	23%	0%	0%	0%	–	9%	0%	5%	9%	0%	5%	14%	0%	9%	5%	0%	0%	5%
16 英語による授業を行う	6%	0%	0%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	29%	6%	0%	0%	12%	–	0%	0%	12%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	6%	0%	0%
17 学生中心の授業を行う	13%	0%	0%	6%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	31%	19%	13%	19%	0%	0%	–	6%	6%	13%	0%	6%	0%	19%	0%	13%	0%	0%
タイプ3																												
18 学生の意欲・関心を高める	12%	4%	0%	6%	10%	0%	2%	0%	0%	0%	6%	0%	2%	0%	2%	0%	2%	–	18%	2%	8%	14%	4%	2%	2%	2%	2%	0%
19 扱うトピックを考える	5%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	0%	2%	2%	2%	0%	5%	5%	2%	21%	–	10%	2%	10%	0%	5%	0%	0%	0%	0%
20 学生の思考を促す	13%	0%	6%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	13%	13%	13%	13%	0%	0%	0%	13%	6%	25%	–	0%	6%	0%	0%	0%	6%	0%	0%
21 話し方・伝え方を工夫する	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	13%	0%	0%	50%	13%	0%	–	13%	13%	0%	0%	0%	0%	13%
タイプ4																												
22 授業資料を工夫する	4%	1%	2%	0%	0%	2%	1%	1%	0%	2%	3%	1%	1%	1%	3%	0%	1%	6%	4%	1%	1%	–	9%	4%	1%	4%	1%	0%
23 板書・ノートテイクを工夫する	7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	13%	0%	0%	7%	67%	–	0%	0%	13%	0%	0%
タイプ5																												
24 体験・実践型学習を取り入れる	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	13%	0%	6%	0%	6%	0%	10%	3%	6%	0%	0%	13%	0%	–	19%	3%	0%	0%
25 外部との交流をはかる	4%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	4%	4%	0%	4%	8%	0%	4%	0%	0%	0%	4%	0%	24%	–	0%	0%	0%
その他																												
26 授業構成を工夫する	11%	4%	7%	4%	4%	4%	0%	4%	0%	4%	7%	4%	0%	4%	0%	4%	7%	4%	0%	4%	0%	19%	7%	4%	0%	–	0%	0%
27 組織内・教員同士の情報交換を行う	0%	0%	14%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	14%	0%	0%	0%	14%	0%	0%	0%	0%	–	0%
28 教員側の意識を高める	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	17%	0%	0%	0%	0%	0%	17%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	–

表4. 授業形態と取り組み内容の関係

	全学共通科目	学部専門科目	大学院科目	講義	演習・ゼミ	実験・実習
1:学生とのやりとりを充実させる	22%	16%	9%	19%	12%	14%
2:小テストを用いる	7%	8%	4%	6%	7%	3%
3:学生の状態を把握する	8%	6%	3%	5%	8%	6%
4:レポート課題を用いる	13%	4%	4%	6%	3%	8%
5:学生の自学自習を促す	6%	5%	8%	3%	9%	11%
6:Webサイト・メールを活用する	6%	4%	10%	5%	8%	3%
7:教育の道筋・意義を語る	2%	4%	1%	3%	2%	3%
8:学生の事後学習を促す	4%	4%	3%	3%	2%	3%
9:若手教員・TA・院生・上回生を活用する	1%	4%	1%	1%	7%	6%
10:学生の事前学習を促す	2%	2%	1%	2%	3%	5%
11:学生の文章執筆・プレゼン指導を行う	6%	9%	13%	5%	17%	11%
12:ディスカッションを取り入れる	6%	8%	10%	7%	12%	5%
13:グループワークを行う	6%	7%	4%	5%	11%	10%
14:学生相互のコミュニケーションを促す	6%	4%	1%	4%	5%	5%
15:専門研究との連携をはかる	0%	5%	12%	4%	3%	8%
16:英語による授業を行う	3%	3%	5%	2%	5%	5%
17:学生中心の授業を行う	4%	2%	1%	2%	4%	8%
18:学生の意欲・関心を高める	10%	11%	9%	11%	13%	14%
19:扱うトピックを考える	8%	10%	9%	11%	7%	8%
20:学生の思考を促す	5%	2%	4%	3%	2%	2%
21:授業資料を工夫する	21%	22%	24%	26%	8%	8%
22:話し方・伝え方を工夫する	2%	2%	3%	3%	1%	0%
23:板書・ノートテイクを工夫する	3%	3%	4%	4%	2%	0%
24:体験・実践型学習を取り入れる	5%	6%	4%	5%	12%	8%
25:外部との交流をはかる	2%	5%	3%	2%	13%	3%
26:授業構成を工夫する	6%	4%	0%	4%	3%	3%
27:組織内・教員同士の情報交換を行う	1%	2%	0%	2%	1%	0%
28:教員側の意識を高める	3%	2%	4%	2%	2%	2%

心を高める」「授業資料を工夫する」といった項目については、全学共通科目、学部専門科目、大学院科目といった科目に寄らず、比較的高い水準で工夫・改善が行われていることがわかる。このうち前者2つは、前節における3つ目のタイプに分類されるものであり、授業に対する学生の意欲や関心の維持といった取り組みは、どの科目においても教員にとって重要視されているものだと考えられる。また、「学生の意欲・関心を高める」については、講義、演習・ゼミ、実験・実習といった授業形態にもよらない形で、広く工夫・改善がなされていることがわかる。

一方で、特定の科目・授業形態にみられる取り組み内容もいくつか挙げられる。例えば、科目の中でも全学共通科目に多く見られる内容として、「学生とのやりとりを充実させる」「レポート課題を用いる」などがあげられる。これらは、前節における1つ目のタイプに該当するものであり、全学共通科目という大学における学びの導入を行う科目として、学生とのやりとりやレポート課題などを通じた学生の学びの実態を把握しようとする試みが重視されているのではないかと考えられる。こうした試みは、学部専門科目、大学院科目と進むにつれて減少していく傾向が見て取れる。また逆に、「専門研究との連携を行う」ことについては、全学共通科目から学部専門科目、大学院科目になるにつれ重視される傾向にある。これは、大学における教育の履歴とその重点の置かれ方が、幅広い知識・教養の獲得から、より先鋭・専門化したスキルの習得へと移行していく様を表していると言える。

また、特定の授業形態にみられる取り組み内容としては、講義形式の授業においての「授業資料を工夫する」という取り組みがあげられる。通常講義形式の授業は、演習・ゼミ、実験・実習等にくらべ、多人数を対象とした形態をとることが多く、受講生である学生全体に、授業内容の情報を伝えることが困難になることが考えられる。そのため、具体的な取り組み事例においても、「視聴覚教材の活用する」「講義内容の概要を印刷した資料を配布する」などの工夫・改善方法が報告されている。他にも、演習・ゼミ形式に特有の取り組みとして、「学生の文章執筆・プレゼン指導を行う」「ディスカッションを取り入れる」ことなどが見られている。

4．おわりに

以上から、具体的な教授場面における、本学での多様な教育改善・実践の実態が見て取れるだろう。いくつかの取り組みについては、相互に利用され効果が得られているように見られる。また、効果的な事例がどのような場面で用いられているか、科目や授業形態がどういったものかなどの情報とあわせて検討することで、他の教員にも共有できる有益な事例として示していくことができるだろう。それだけでなく、同時に効果がなかった事例についても詳細な分析を行うことで、改善・実践として「うまくいかなかった」原因についても考察できる可能性がある。今後は、数量化可能な多肢選択式の意識調査設問との対応関係から、本学における教育改善・実践の取り組みについて、どういった意識･意図・目的等のもと行われているのか、教育の筋道を明らかにした上で、より多くの教員に対し、汎用性のある改善のモデルとして紹介・応用していけると良いだろう。特に、多肢選択式の設問では、取り組みについての重要さの認識についても検討されている。各教員が実際に行っている取り組みと、どの取り組みが重要かであるかの認識は別物であり、重要であると認識しているにもかかわらず、実際には取り組み事例として出ていない例や、逆に重要ではないとの認識を持っているが、取り組み事例として書き出しているものなど、そうしたズレが何を意味しているのかも同時に検討する必要があるだろう。多肢選択式設問の結果と、本稿で扱った自由記述部分結果とのマッチングについては、今後も更なる検討課題として取り扱っていきたい。

なお本稿で扱った、実際の教育実践に関する自由記述の「効果的であった／なかった」教育的取り組みの内容の結果、すなわち個々の教員の日常的教育改善・FDの実態については、本稿の分類結果をもとに、各取り組み内容を教員が相互に検索・参照しやすい形で、今年度末よりデータベース公開を行う予定である。

注

1）大阪市立大学・大学教育研究センター（**2013**），「大阪市立大学の教育・FDに関する教員の意識調査　本調査数値部分報告書　本調査自由記述部分報告書（中間）　予備調査報告書」.

2）飯吉弘子・平知宏（**2014**），「大阪市立大学の教育･FDに関する教員の意識調査「本調査」数値部分の分析」，大阪市立大学大学教育研究センター『大学教育』，第**11**巻，第 **2** 号，**55-69**.